

校内の別室環境の見直しと教室復帰に向けた支援の充実

不登校生徒の状況

中学校 3 年生の対象生徒は、学校生活が自分の生活リズムと合わないと感じており、中学校 1 年生の 3 学期から欠席が目立つようになった。中学校 2 年生の 1・2 学期は、全く登校しない週も見られ、不登校状態が継続した。中学校 2 年生の 3 学期からの保健室登校を経て、現在は教室で過ごすことができている。

具体的な取組

○校内の組織的な取組

- ・企画運営会議、職員会議など様々な会議において、教職員間で当該生徒についての情報共有を行った。
- ・当該生徒と S C で週 1 回の面談を継続的に行った。
- ・教員が「本人の気持ちを一番大事に」という共通認識で生徒と関わった。

○校内の別室環境の見直し

- ・明るい雰囲気スペースに余裕のある場を提供した。
- ・常に支援員が 1 人はいる環境にして、生徒が安心して過ごせるような場（保健室）を提供した。



○教室復帰に向けた支援

- ・本人の意向を聞きながら、焦らず、教室復帰のタイミングの計画を立てた。
- ・授業の空き時間のある教科担任の教員が、生徒の学習支援を行った。
- ・他の生徒も出入りできる場所で、他の生徒から完全に遮断されることがない場を提供した。

○保護者と丁寧に関わる仕組み

- ・保護者から積極的な関わりがあり、週 1 回は担任などと話す機会があった。
- ・学校から保護者に定期的にプリント類を配布するよう心がけた。
- ・S C と保護者の面談も継続的に行うことができた。

成果

担任だけではなく、教職員全体で不登校の生徒を見守るという組織的な体制が効果的であった。中学校 3 年生の 4 月まで不登校だった生徒が 3 人、教室に復帰した。今年度は、学校全体における新規の不登校の生徒は 1 人にとどまった。

課題

3 年生以外の学年も不登校生徒数が減少するように引き続き組織的な対応が必要である。

不登校対応加配教員を活用した本校の取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は1学期までは数回欠席していたが、2学期1週目から登校しなくなった。理由は、学校や学年の雰囲気自分に合わないことや、起立性低血圧により朝起きがけに力が入らないことである。その後、登校支援担当教員との面談を重ねていくうちに、別室で自学を進めたいという本人の希望が出てきた。

具体的な取組

○支援会議の実施

毎週1回、支援委員会（各学年の不登校担当教員・養護教諭・SC・SSW・校内別室指導支援員）を開き、当該生徒の情報を分析して、指導方針を決定している。会議録を校内の全教員が閲覧できるようにして、共通理解を図っている。

○加配教員（コーディネーター）の役割

- ・支援会議で支援方針を確認する。
- ・SCからQUのデータについて助言を得て、校内で情報を共有する。
- ・校内別室を整備する。別室担当の勤務状況の確認と連絡を行う。
- ・以上のことを全教員に周知する。

○生徒の居場所づくり

教室に入ることに抵抗感を感じる生徒の学びを支援し、生活リズムを保つことができるように、自習できる別室を用意している。

可動式のパーティションも用意して、必要に応じて使用できる。



○SC、SSW、関係諸機関との連携

支援の助言を得るのみならず、SCやSSWによる授業観察での見立てやQUのデータ分析などを通して、心理的な不安を感じている生徒の早期発見・支援につなげている。

また、親和的な学級づくりの助言を得て、不登校の未然防止を図っている。

成果

対象生徒は、登校の目標を自己決定し、目標をもって実行していく中で自信を付け、現在は毎日登校して教室で学習できるようになった。この生徒をはじめとして、様々な取組により、今年度登校できるようになった生徒は、学校全体で8人いる。

課題

登校できるようになった生徒の心のケアを継続して行うことや、良かった点を今後に生かすことが課題である。